

はな華 77



2025.1.2 OTOSOIWAI Photo by Yuki Setoguchi

関西福祉大学との合同企画 兎追いし彼の山プロジェクト

施設長だより(岩西太一)
スタッフボイス(二星木実・井上優)
朝礼スピーチ(入江知至・前田美帆・栗田侑弥)

今日は私のお気に入りの詩を紹介します。アメリカの詩人ロングフェローの詩です。

「老いは装いこそ違え、青春に勝るとも劣らぬ好機なり。あたかもたそがれ過ぎし夜空に白昼隠れて見えぬ星の満点に輝けるに似たり。」です。私はこの詩を読んだときに、老いた時が青春に勝つくらい良い時であるというのに驚きました。老いることはやはり死へと向かう暗い道に思えます。しかし、この詩を読んで、老いることはただの暗闇ではなく、星が綺麗に輝く静かな特別な夜なのかもしれないと思いました。

昼間である若い頃には見られなかった、老いて夜になった今だからこそ見える星の輝きとは、「利用者の人生にとっての輝きとは何でしょうか。私は清華苑で働き始めて7カ月が経ちましたが、いつも「利用者から元気と勇気を頂いてばかりです。」



「ありがとう」
「あなたが来てくれてよかった」
「あなたが大好きだから」
「明日も来てちょうだいね」
一つ一つの利用者から頂いた言葉が、新人で不安いっぱい私の背中をそっと支えて前に押しつけてくれました。
いつも私たちを励ましてくださる人生の大先輩の皆さまの、ささやかな普通の生活の中に、いかに星の輝きを見出せるか、私たち介護員の日々のケアにかかっていると思います。
最期の瞬間まで、お一人お一人の人生の輝きを引き出せるよう、考え続け、頑張っていきたいです。
(介護員 前田美帆)



昨年度の1月から、小学生の時に通っていたバレーボールのクラブチームに月に数回程度指導に行っています。約10年前とは時代が大きく変わり、少しの事で指導に問題があると言われます。指導に熱が入り、つい厳しくなってしまうことがあります。夜寝る前にそのことを思い出して、私の指導が原因で辞めたりしないだろうかと不安に駆られる日もあります。

しかし、練習に行った際には子供たちから「さとしコーチ！さとし君！」と集まってきてくれる姿を見ると、厳しくも愛ある指導ができていのかと勘違いをしてみました。
私のバレーボールとその指導方法の原点は当時の監督とコーチです。いつか子供達の中の一人でも、原点はさとしコーチだと言ってもらえるように頑張りたいです。

最後に少し余談ですが、低学年の子は靴紐がまだ一人で結べないので、解けた時に私の元へきて、「結んで」と上目遣いでお願いしてくる瞬間はとっても可愛いです。

(介護員 入江知至)



清華苑に入職してから、早くも半年が経ちました。仕事の業務的なことは段々と覚えてきましたが、まだまだ成長しなければならぬことがたくさんあると感じます。

今日は、あるご利用者のお話を紹介したいと思います。このご利用者は数ヶ月ほど前から出勤時や退勤時にホールの窓から手を振って見守ってくださいています。私が出勤した時は、「今日、いつ帰るん？泊まり？」と聞いてくださり、退勤時には「気をつけて帰りや」と窓から手を振って、お見送りをしてくださります。
そして、私自身も手を振り返し、次の出勤時には「この前、お見送りして下さってありがとうございます」と「ございます」と感謝の気持ちを伝えるようにしています。今では、毎日、出勤時、「朝、しんどいな」、「大変だな」という時でも、力をいただいております。「頑張ろう」という気持ちになります。

入職してから、特に最近、たくさんのご利用者とのコミュニケーションをとっており、信頼関係が築けているように感じます。こういった部分は、自分自身とても成長したように感じます。
(介護員 栗田侑弥)

編集後記

新年あけましておめでとございます。ご利用者へ「家族、地域の皆さまからの温かいご支援とご理解、ご協力を賜り、無事に新春を迎えることができましたことを心より御礼申し上げます。今回はクリスマス会やお属蘇祝いのお素敵な瞬間をお届けするともに、職員の想いが沢山詰まった内容となっております。本年も宜しくお願いたします。
(生活相談員 原田七海)



レス・イズ・モア！

施設長 岩西太一

新年明けましておめでとうございます。旧年中は格別のご厚情を賜り、誠にありがとうございました。健康やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

年末から妻と子どもたちが帰省しており、年末年始少し寂しいですが、しばしの1人時間を楽しんでおります。一度帰省すると1か月、長い時は2か月ほど帰省をします。というのも妻の実家は「黒島」という八重山諸島に浮かぶ周囲12kmの小さな小さな離島です。石垣島から更に高速船で30分の場所に浮かぶハート形の島で、島民約200人、牛約3000頭の通称「牛の島」です。

島民のほとんどが繁殖農家（母牛に子牛を生ませ、その子牛を育てる）であり義父と義弟も牛飼いをしています。9か月ほど育て全国各地の肥育農家（肉牛に育てる）へ引き取られていきます。

八重山諸島といえば、石垣島はもちろん、小浜島、竹富島、西表島、波照間島など有名ですが黒島にはこれといった観光資源もありません。初めて来島したときには、聞いてはいましたがその環境に驚きました。

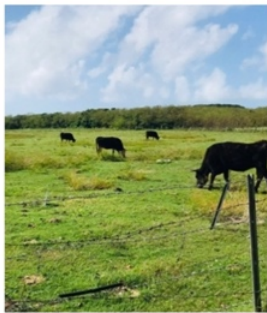
見渡す限り牛、牛、牛、、、道路には野良ネコならぬ野良ヤギがトコトコ歩き、野生化したクジャクが羽を休めて道路の真ん中に鎮座しています。島には信号機もなく、商店は唯一「たま商店」、警察も常駐はなく、病院もありません。ネット環境も不安定でなかなか電波も入りません、普段の生活からは考えられない不便な「何も無い」環境です。しかし、同時にたくさん「ある」を感じることが出来るのです。

電灯が無いことで見える満点の星空、携帯電話が無いことで感じるたっぶりの時間、病院がないことで感じる健康な身体、コンビニが無いことで感じる無駄使い、音が無いことで聞こえる風や木々の音など数えればきりが無いほど普段の生活では感じえない「ある」を気付かされ、心が洗われます。同時に日頃、いかに便利な生活をしているのだろうと普段の当たり前と感じていることの「有難さ」も再認識させられます。

当死も、昨年は様々なICT機器や介護用リフトなどの介護機器を導入しました。今年はそれらを更に活用して、ご利用者の皆様が安全・安心に生活が出来るように努力をして参ります。

今年も、変えてはいけない大切なものを守るために、時には変わりゆくことを選ぶ一年にしていきたいと思っております。至らない点が多いかと存じますが、本年も精一杯頑張る所存ですのでよろしくお願ひ申し上げます。

最後に、黒島はサンゴ礁が隆起して出来た陸地で坂のない平坦な島なので、牧場の緑の風景の中をレンタサイクルでゆっくりとサイクリングするのがおすすです。また黒島の海は八重山でもトップクラスの美しさといわれ、産卵のためにウミガメが上陸してきます。皆さんも機会があれば是非、お越しください。





エピソードに掲載されているご利用者と写真に写られているご利用者は別の方で関係はありません。



祖母と二星介護員とのツーショット！笑顔がそっくりです！

限りある時間を大切に

介護員 二星木実

半年ほど前からありがたいことに祖母が清華苑を利用して頂いています。今まで介護員としてご利用者に接してきましたが、ご利用者の家族という立場になり、介護施設のありがたさというの身に染みて実感しています。私が出動していない時に「こんなこと言っていたよ」と普段では分からない事を知れるというのは家族を介護する立場として、とてもありがたいことだと感じています。

祖母は認知症と診断されていますが、認知症になる前は、一緒に餅つきをしたことや、畑作業をしている姿、親戚が集まった時に食事の準備している姿等、私が生まれてから20数年の祖母の姿を覚えています。

清華苑のご利用者ご家族も同様にそれぞれの背景があることを改めて思いました。今までも分かっているつもりではありましたが、実際の立場になり、ご家族の思いや心情についてより理解を深める事ができました。

そして、家族に見せる顔と職員に見せる顔と違うのはやはり違うものだと感じます。家族にはやはり安心したような柔らかい表情になりますが、職員に見せる顔はどこか緊張しているような雰囲気が見られます。

清華苑のご利用者もご家族が面会に来られた際は、皆様バツと表情が明るくなります。家族というのは、何よりも安心できる存在であるのだと感じます。

認知症になった祖母でも私を見かけると「このみ」と名前を呼んでくれることは今も昔も変わりません。そして私に向けてくれる表情もずっと柔らかい表情で笑顔の祖母のままで。祖母との限りある時間、ご利用者との時間、どの時間も大切にしていきたいと思っています。

STAFF VOICE

スタッフボイス

特別養護老人ホーム 清華苑

介護、看護、相談、調理、事務、それぞれの部署で働くスタッフの生の声をご紹介します。



社会福祉法人 三幸福社会
清華苑
miyukifukushikai seikaen

気づきの視点

介護員 井上優

ご利用者の日々の生活の中で、何か変化に気付くことはとても重要なことです。

私が勤続2年目の頃のA様とのエピソードです。お部屋のベッドでお食事を召し上がられるA様は食事が終了するとナースコールを押して職員を呼んで下さいます。

ある日、お食事が終わったあと、A様からのナースコールがいつもの時間に鳴らなかったのでお部屋を訪室すると、お食事は終わっていませんが、ナースコールが床に落ちて手が届かないところにありました。ナースコールを戻し、テレビのリモコンや携帯電話などベッド周辺を整えていると、A様は「ありがとう。井上さんはいつもいろんなことによく気が付いてくれるね」と仰って下さいました。

そう言われたことが嬉しくて、これからもご利用者が快適に過ごせるよう、気づきの視点を大切にしていこうと思えました。

私たち介護員は、ご利用者と1番近くにいる存在です。だからこそ、ご利用者との関わりの中で様々なことに気が付くことができます。

例えば、以前になかったケガや身体を動かす際の痛みの訴え。普段とは違った表情や不穏な状態。発語が難しいご利用者が何かについて訴えている時など、それぞれの思いを汲み取りニーズに応えていきます。

そのような気づきを相談員やケアマネジャー、看護師等多職種と情報共有し、ご利用者の生活支援に役立てていきます。これからもご利用者が安心して清華苑で過ごして頂く為に生活環境など小さな変化にも気が付ける職員でいたいと思います。

想いに寄り添う

介護主任 長田和真



「兔追いし彼の山」童謡の故郷を聞く、皆さんは何を思い出しますか。

今回、関西福祉大学 社会福祉学部の谷口教授から「兔追いし彼の山プロジェクト」のお話をいただきました。ご利用者が「もう思い残す事はない」と思えるようなお手伝いをするというもの。日々の業務が目まぐるしく、施設で働く職員だけではご利用者一人ひとりの想いや夢を実現する事は困難です。そこで、施設側の人的手助けとして、また学生の福祉に関する勉強を踏まえ、それぞれのご利用者から想いや夢をヒヤリングし、それを実現する為のお手伝いをするという趣旨です。

私はこのお話を初めて聞いた時に、すぐにイメージが湧きました。日常的にご利用者と関わる中で【想い】を聴く機会が多かったからです。

私の顔を見ると「家に帰って仏壇の掃除をしたい」と仰っていたM様。私の中で、まずその想いを叶えて差し上げたかったのですが、残念ながらこのプロジェクトが軌道に乗る前にご逝去されました。その悔しさもあり、このプロジェクトへの想いは益々強くなりました。

私達にとっても初めての試み。しっかりと応えていきたいという思いから、今回はプロジェクトの対象を少人数に絞らせて頂きました。

ご利用者、学生、職員の3者間で行ったヒヤ

リング。「どんな事がお好きですか」「思い出の地はどこですか」等些細な質問に、次々と溢れ出てくるご利用者の想い。話す表情や仕草を見ていくと、今すぐにでも叶えて差し上げたという気持ちになりました。

ご利用者から聞き取った想いをどう形に変える事が出来るか。学生同士の話し合いも熱が入ります。

E様は長らく明石で生活されていた為、馴染みある魚の棚へ外出する事に。学生がE様の車椅子を押し、懐かしい風景を感じながらのお買い物。初めは緊張した面持ちだったE様でしたが、次第にマスクを付けていても分かるほど、頬が緩んでおられました。

帰りの車中、学生の粋な計らいで、大好きなビートルズの音楽を聴きながらドライブ。施設に到着すると、「ありがとう。楽しかった。ほんまにありがとう。ありがとう。」と、何度も何度もお礼の言葉を口にして下さったE様の表情は今でも鮮明に覚えています。

兔追いし彼の山プロジェクトに参加した事で、ご利用者の人生の1ページと一緒に彩る事が出来た事を嬉しく感じます。これから寒い季節ですので、このプロジェクトは一旦活動休止しますが、暖かくなった頃に、活動を再開し、一人でも多くのご利用者の想いに寄り添っていきたくと思います。

★清華苑華プロダ「兔追いし彼の山プロジェクト第1弾、第2弾」を是非ご覧ください。

QRコードからブログ記事をご覧ください↑

